

## 大鹽中齋と林良齋

### 一 良齋の中齋との出逢い

——池田盛之助の日記を手がかりに——

池田草庵の甥である池田盛之助が、池田草庵の勧めをうけて林良齋の弘浜書院を訪れたのは、嘉永二年（一八四九年）のことである。時に盛之助二十四歳。一月二十三日に但馬の八鹿を出發して、二月六日に多度津に到着、翌七日に弘浜書院において林良齋に謁見した。一ヶ月の間、盛之助は弘浜書院に滞在して林良齋の薰陶を受けて、三月六日に歸國の途に就いた。八鹿に歸り着いて池田草庵に歸國報告をしたのは、四月五日のことである。池田盛之助はこの修學旅行のことを『己酉日記』（侍林良齋先生記、草庵先生姪池田盛之助手録）として残している。

池田盛之助が林良齋に會つたのは、この時が始めてではない。もともと旅行が好きでなかつた池田草庵が獨學固陋の病に陥ることを警戒して、伊豫に近藤篤山を訪ねることを主たる目的にして、弘化二年（一八四五年）七月二十九日に八鹿を出發した。池田盛之助は從者として他の四人と共に參加した。この旅行についても盛之助は『中州遊覽日記』を残しており、それによると、八月九日に林良齋に、八月十四

吉田公平

日に近藤篤山に、八月十九日に吉村秋陽に、八月二十五日に山田方谷に會見していることがわかる。この遊覽は池田草庵に望外の收穫をもたらした。林良齋に會えたことである。お互いに「心友」と認めあい、林良齋が死去するまでの間に、眞摯にして敬愛に満ちた書簡のやりとりが行われ、今に残る「往復書簡集」は、當時の儒學者の「學問」の有様を如實に我々に示してくれている。この時に訪れた學者の中で、一人近藤篤山だけが朱子學者であつた。尾藤二洲門の俊秀であつた近藤篤山の評判は高かつたようで、さればこそ池田草庵は近藤篤山に會うために長旅に出たわけだが、豫想通りの朱子學者であり、とりたてて獨自の學識を持ち合わせた學者ではないことを確認するに終つたようである。しかし、その人格には感心したことは、のちに林良齋との往復書簡においても繰り返して述べている。林良齋が近藤篤山と朱陸論争を展開していることでもあり、草庵にとつても良齋にとつても、近藤篤山は親しく知る朱子學者の典型として貴重な存在になる。吉村秋陽・山田方谷との會見についても述べているが、主題との關係が薄いので、今は述べない。

『中州遊覽日記』八月九日、發丸龜、晝着多度津の條には、次のように記している。

林良齋之家、祿四百石餘、其家望々然大家也。其交人謙而有體。其爲學、少而遊丸龜、既而遊乎江府長野之門。長野先生始令讀王子之書。自是少小有志于斯學。此時年二十一。其後謁大中齋、草卒歸。後復謁止五六十日。

中齋平生精神氣魂極盛。時々晝夜不寐者十餘日。精神如故。常不飲酒。飲則盡斗半、無異於平日。飯は一度に十杯位。凡行路三十里。夜は八つに起て觀天象、召門人講論、雖冬日、必四面開戸而坐。門人皆不堪、而中齋依然不以爲意。其氣魂之壓人、門人皆不敢仰見。其在家賓客之來無虛日。又自起教門人武技、終日多事、而其讀書該博如此、抑亦可怪也。

右中齋之事、林良齋に聞く。

良齋云。白沙の集を讀み、且人譜等の書を讀む。詩經は東萊讀詩記を相用ふと。風雨章、風雨如晦、鷄鳴不已。朱子以爲淫詩。東萊の説は賢者の事とす。源先生之説と合す。

『己酉日記』二月十七日の條には、林良齋の言葉として、次のように記している。

先生曰、十歲繼家。十四五時、丸龜にて校師に隨而學。十八の時、江戸に勤番、長野豊山、君家に出講、月六回。此時月に七八回、豊山宅へ行。同年十二月歸國。歸國之時、『陽明文錄』豊山より被送、曰「作文之助けにせよ」と。既にして讀之非徒文章之書を知る。又三輪執齋之著書を執て見る。『翁問答』、最後に『傳習錄』を讀む。十九より溜飲を患ふ。讀書甚害あり。宅内に師を呼、擊藝を學ぶ。是亦溜飲に害あり。又弓を習ふ。二十一に至て溜飲之患甚し。是より三年常臥常藥。二十六致仕。二十七猶病不治。辻某云、子病藥石之治する處に非ず。酒を一日一合づつ

飲むべし。乃此法に従ふ。其年九月半頃に至り、始て一合づつ飲むことを得。其後病癒。出行之意生ず。乃浪華に行き、洗心洞に寄宿、三四十日。此外伊豫近藤篤山を訪ふ耳云々。

自らを語ることの少ない林良齋が、遠方より來た朋友を前に、珍しく開陳した述懐である。はじめに、この述懐を少しく補いながら林良齋の經歷を略述し、次に大鹽中齋との邂逅について述べることにした。

林良齋は、文化五年（一八〇八年）六月十三日に、讀岐・多度津藩の家老である林時重の末子として誕生する。十歳の時、異母兄の時達の養子となり家督を繼いだ。十四五歳の時に丸龜の多度津藩藩邸内にある藩校正明館に通い、尾藤二洲の門人である巖村南里に師事して儒學詩文を學んだ。十八歳の時に江戸勤番となり、同じく尾藤二洲の門人である長野豊山に従學する。歸國の折り、豊山から送られた『陽明文錄』を讀んだことが契機となつて、良齋は陽明學に開眼する。朱子學者であつた豊山が『陽明文錄』を與えた意圖が奈邊に在つたのかを知る由もないが、奇縁といえよう。この後、三輪執齋の著書『執齋日用心法』の類であろうか、中江藤樹の『翁問答』王陽明の『傳習錄』を讀破した。『中州遊覽日記』によると二十一歳の時に「斯學に志し」、『己酉日記』によると十八歳の時に陽明學に熱中した。この後、溜飲の持病を抱えながら家老職を勤めるが、二十六歳の時に辭職して家督をも養嗣子の佐太郎に譲つてゐる。天保六年、良齋二十八歳の三月十五日に大鹽中齋を洗心洞に訪ねるが匆々に辭去してゐる。この年の秋に大鹽中齋が多度津を訪れてゐる。翌年天保七年二月十三日、再び洗心洞を訪ねて三四日間滞在してじつくりと研鑽してゐる。約一年後の二月十九日に大鹽中齋（四十五歲）は「義學」してゐるので良

齋は晩年の弟子ということになる。天保十二年、三十四歳の時に伊豫に近藤篤山を訪ねて朱陸論争を展開し、翌年にかけて書簡を往復する。池田草庵が近藤篤山を訪ねて多度津に良齋と學談するのは、良齋が篤山を訪ねた四年後のことであつた。池田草庵を介して春日潛菴・吉村秋陽と文通することになつたから、その意味でも良齋にとつて池田草庵は正しく益友であつた。歸國した池田草庵と自得の所得を書簡を往復して交換するなかで、盛之助が林良齋の薰陶を受けることになり、盛之助が歸國した一ヶ月後の五月四日に、林良齋は死去した。享年四十二歳。

林良齋の生涯は、『陽明文錄』を讀んで陽明學・斯學に開眼した十八歳、大鹽中齋に參學した二十八歳、池田草庵に邂逅した三十八歳を以て晝期できよう。良齋が大鹽中齋に參學した意味を考える前に、良齋が參學した當時の大鹽中齋を確認しておきたい。

## 二 大鹽中齋の著書

林良齋が二十八歳の時に最初に洗心洞を訪れた天保六年は、大鹽中齋四十三歳の時であつた。天保元年三十八歳の時に大阪東町奉行與力を辭職してから既に五年、その間、大鹽中齋は洗心洞において讀書・講學・執筆に専念する。『洗心洞學名學則並讀書書目』（天保二年・三十九歳）、『古本大學刮目』稿本（天保三年・四十歳）、『洗心洞割記』（天保四年・四十一歳・家塾刊）、『儒門空虛聚語』（天保四年・四十一歳・家塾刊）、『洗心洞學名學則並答人論學書』（天保五年・四十二歳・家塾刊）、『増補孝經彙註』成稿と、大鹽中齋の著書は、この五年間に執筆刊行されている。もちろん、三十八歳の時に辭職するはるか以前の、二十四歳の時に呂新吾の『呻吟語』を讀んでその淵源を王陽明にありと認

めた時から、陽明學に親しんでいたとはいへ、その所得を著書編纂という形にまとめ上げるには、與力職はあまりにも激務であつた。大阪東町奉行高井實徳の知遇を得て、豊田貢事件・弓削新左衛門・破戒僧事件（所謂三大功）などの難事件を擔當したことに象徴されるように、大鹽中齋は法務官僚としても辣腕を振るつた。加えて近藤重藏・頼山陽等の文人儒學徒と廣い交際を重ね、子弟に文武兩道を教えてもいた。その間の蓄積が、高井實徳の辭職を契機にして自らも辭職した後、一氣に著書・編纂という形に實を結んだのである。學者としては成熟した時期に、林良齋は參學したことになる。林良齋が洗心洞に入門した天保六年三月には、『増補孝經彙註』が大阪の精義堂より刊行された。林良齋が歸國した後の四月には『洗心洞割記』『洗心洞附錄抄』が同じく精義堂から刊行されている。また六月には『儒門空虛聚語』『儒門空虛聚語附錄』が京屋淺次郎・河内屋グループから刊行されている。この年の秋に、大鹽中齋は多度津を訪問して林良齋に再會しているが、この以前に林良齋はおそらく大鹽中齋の著書を手にして讀破していたのではあるまいか。もしも林良齋がまだ觸目する機會に恵まれていなかったとしたら、あるいは大鹽中齋が多度津を訪問した時に既刊の自著を携えていったかもしれない。天保三年六月・四十歳の時に成稿しながらまだ上梓されていなかったのは『古本大學刮目』である。中齋の主要著書四種の内、この『古本大學刮目』は原稿が早く完成しながら刊行が最も遅れた。その間に他の三書が次々と刊行されていた。何故遅れてしまったのかというと、次のような経緯があつた。大鹽中齋は天保四年四月に『洗心洞割記』を刊行した時に、自らの爲學の經緯を詳細に述べて教えを乞う旨の「寄一齋佐藤氏書」を添えて、「陽明學者」佐藤一齋に送つたところ、佐藤一齋から

は、自分はあなたが思いこんでいるような陽明學者ではないという趣旨のすげない返書をもたらした。それにもめげずに大鹽中齋は、天保四年十二月に『儒門空虛聚語』を刊行した際に「藤樹眞蹟致良知跋文」を添えて、あらためて『古本大學刮目』の序文を佐藤一齋に依頼した。翌天保五年一月に佐藤一齋から断りの返事をもたらう。翌二月に伊勢に齊藤拙堂を訪ねたときに『古本大學刮目』の序文を依頼した。齊藤拙堂は序文を執筆したのだが、それを大鹽は採用していない。大鹽中齋自身は『古本大學刮目』は『大學』の本領を發明したものであるという自信と自負があり、それだけに然るべき序跋を冠して刊行したいという願いがあつて、慎重になり、そのために刊行を急がなかつたのではないのか。天保七年二月に林良齋が再度洗心洞を訪れた時に、大鹽中齋から『古本大學刮目』の跋文を執筆するように命じられる。大鹽中齋は刊行を決意したのであらう。良齋は「古本大學刮目跋」を執筆するが、これは採用されなかつた。『古本大學刮目』は、林良齋が洗心洞から歸國した直後の六月に大鹽中齋自身が天保三年六月に執筆していた「古本大學刮目自序」のみを載せて刊行された。この半年の後に大鹽中齋は死去した。

### 三 林良齋の著書

林良齋の、今に残る著書を書式に基づいて分類すれば、書序跋記・四書注釋・編纂書・割記詩文に大別できるものの、個々の執筆年次が不明なものが多い。そのなかでも大鹽中齋・近藤篤山・池田草庵に關係するものは、交流の時期が判然としているので、年月の記載がないものでもほぼ確定できる。

#### 大鹽中齋關係

#### 大鹽中齋と林良齋

質問草稿(一)・天保六年五月十三日、質問草稿(二)・天保七年二月十三日、古本大學刮目跋・天保七年四月上流、奉送中齋大鹽大教鐸序・天保六年秋、中齋先生中庸講義・天保六・七年。

#### 近藤篤山關係

奉質篤山大教鐸・天保十二年、與近藤篤山論學書・天保十二年十月十三日、十三年三月八日、四月四日、某月某日。

#### 池田草庵關係

林良齋・池田草庵往復書簡集・天保十四年―嘉永二年。

四書の注解書の類として、論語略解・論語略講主意・論語學徵・大學之序・大學功夫・大學古本傍注・修道說中庸傍注・良齋先生晚年定說中庸講義・中庸略講主意・孟子略講主意があり、編纂書の類として、陸王學徵・朱學要旨・學徵略(天保十二年三月序)・學徵影題(天保十二年三月序)・類聚要語(天保十二年三月序)・聖宗微言がある。内容から判断すると、これらの編纂書は天保十二年三月の前後に編纂されたものと考えられる。

林良齋は嘉永二年五月四日に死去したが、池田草庵が翌嘉永三年に編集刊行した『自明軒遺稿』に収める二十五の記書序語詩のすべてに執筆年次は記されていない。他に友人知人に與えた書簡八通、割記詩文として遊京紀行・自明軒割記・自明軒自警錄・致良知・易說・執齋日用心法欄外書・聶約案語・乞正詩文稿・乞正文稿があるが、この中で執筆年次が分かるのは、遊京紀行(天保十四年)致良知(天保八年六月)のみである。

執筆年次の不明なものが多いことは、良齋の思索の過程を綿密に確認しようとするときには、確かに障碍になるが、概ね大鹽中齋に參學した後の著作と見て大過はない。今後、個々の著作を相互に比較検討

し、良齋の交友關係がより明らかになれば、執筆年次も確認できるよ  
うになるであろうが、年次考證の不備な今の段階では、執筆年次の不  
明なものは良齋三十歳以後のものとして論を進めることにする。

## 四

林良齋は、巖村南里・長野豊山・大鹽中齋に師事した。巖村南里に  
は句讀を學び詩文の基礎を學んだ。長野豊山には朱子學・性理學を學  
んだ。そして『陽明文錄』を讀む機會を與えられて心學に開眼する契  
機を得た。修學の課程としてはいずれも有意義なものではあつたが、  
良齋が心服したのは大鹽中齋であつた。林良齋の師友關係を一瞥す  
ると、長野豊山といい、近藤篤山といい、共に伊豫川之江の尾藤二洲の  
門人であることは注意を要する。尾藤二洲は寛政三博士の一人であ  
る。清初の陸隴其一派の朱子學理解を基礎に所謂寛政の異學の禁を推  
進した朱子學者である。彼らに反發したのが佐藤一齋・大鹽中齋であ  
るが、林良齋の修學期には朱子學派はまだまだ勢力を保つていたので  
ある。むしろ修學期には朱子學を儒學の基礎として學ぶのが一般的で  
あつた。『陽明文錄』を讀んだ林良齋が「徒に文章の學に非ず」と會  
得して「斯學に志した」と述懐していたように、朱子學が單に「文章  
の學」として學ばれるばかりで、心學として機能していなかつた。朱  
子學も亦心學であり、否、朱子學こそが心學であるという主張は、心  
ある朱子學者が提唱したことではあるが、その本領が見失われてしま  
いがちであつた。逆縁ながらも長野豊山は林良齋の人生に轉機をもた  
らすことになつた。王陽明の良知心學に開眼することがなかつたなら  
ば、少しく健康を回復したことを僥倖として、他でもない大鹽中齋を  
洗心洞に訪ねることもなかつたのではないか。巖村南里・長野豊山に

師事して朱子學の基本を學んでいたことは、もう一つの意味で貴重な  
修學であつた。それは、後に再述するが、林良齋は、陽明學を是とし  
ながらも、朱子學を全面的に否定することはしていない。四書の注釋  
に關しては、しばしば「朱註是也」と肯定している。字義文義の注釋  
に限らない。心性論においてもそうである。それは、林良齋の獨創で  
はなく、大鹽中齋を繼承するもののだが、林良齋が朱子學を心學と  
して理解していたことを物語る。長野豊山のもとで朱子學を學んだこ  
とは、決して無駄ではなかつたのである。穿つた見方を許されるなら  
ば、長野豊山は尾藤二洲風の教條的な朱子學理解の行き詰まりを祓か  
に感じていたので、眞摯に學ぶ林良齋に劇藥として『陽明文錄』を與  
えたのではないのか。もし、そうだとすると、林良齋は長野豊山の期  
待に十二分に應えたことになる。

池田盛之助の『中州遊覽日記』が伝える、林良齋が在學した頃の大  
鹽中齋の熱中ぶりは尋常ではない。山崎闇齋や平田篤胤などにもその  
ような傳説があるが、林良齋の創作ではあるまい。林良齋は天保六年  
三月に洗心洞に參上して大鹽の熱氣に中てられ、天保六年秋に今度  
は大鹽中齋が多度津に良齋を訪ねて學談し、翌二月には良齋が再度  
洗心洞を訪ねて長期滞在している。いわば良齋はこの二年間は大鹽漬  
けであつた。林良齋が天保六年三月に洗心洞に參學したときに『傳習  
錄』に開示されている王陽明の『春秋』理解、『論語』知及之章の解、  
未發已前氣象を體認することについて、大鹽中齋に質問を提出した。  
大鹽は良齋が歸國した後の五月十三日に書簡を以て返答した。それが  
『質問草稿』(二)である。最初の洗心洞訪問を良齋が「草卒に歸る」と  
述懐しているのは、大鹽の返答を聞かないままに歸國したことを意  
味するののか。この秋に大鹽が多度津を訪れた時には連日親密に懇談し

て同席者をも感動の渦に巻き込んだようである。良齋は「我は吾が中齋先生に於いて之を徵す」いうほどの心酔ぶりであった。（奉送中齋大教鐸序）。翌天保七年二月十三日に訪問したその日に『傳習錄』『洗心洞剖記』所載の語録に關する八箇條に亘る質問を提出した。それに大鹽が答えたのが『質問草稿』（二）である。質問が心性論の核心に迫っているのは良齋の思索に成熟がみられたからか。大鹽中齋が林良齋に「古本大學刮目跋」を執筆するように命じたのは、良齋が大鹽に直參したその所得にめざましいものがあつたからではなかつたか。この「古本大學刮目跋」が稿本のままに良齋の下に残されたものを見ると、或いはこれは大鹽に送られなかつたのかも知れない。

ともあれ、大鹽中齋と邂逅したことが、林良齋が良知心學を深化させる上で決定的な契機になつたことは、疑いの餘地はない。これほどに恩恵を受けた中齋先生のことを、林良齋は一人池田草庵に與えた書簡の中で言及するのみである。不思議なことではあるが、林良齋が忘恩の徒であつたからではあるまい。大鹽が「義學」に失敗した後の當局の探索が厳しかつたがために、諸方面への累を恐れて沈黙したのではなかつたか。そして池田草庵と書簡を往復し始めたころはほとぼりも冷め、他ならぬ池田草庵なればこそ吐露したのかも知れない。

林良齋が終生大鹽中齋を先師として敬慕していたことは、良齋の注釋書・編纂書をみると歴然とする。

## 五 林良齋の注釋書

林良齋の注釋書は先に見たとおりである。『大學』『中庸』『孟子』の注解にも大鹽中齋の影響が認められるが、ここでは大鹽中齋の理解が林良齋によつて咀嚼された後に、林良齋の理解として表現されている。

る。『論語』については、假名交じり文の『論語略解』と『論語略講主意』（九葉のみ）があるが、これも同案である。『論語學徵』のみは趣を異にして先師大鹽中齋の理解を、林良齋の選擇が介在するもの、直接に傳える。

『論語學徵』は林良齋の注釋書の中では最も大部なものである。編纂書の中で最も大部な『學徵影題』と、分量の上では雙璧をなす。注解の様式は、例えば「王龍溪曰」と冠して先學の理解を先に述べたの後に「愚謂」と冠して自説を述べる。援軍にした先儒の數は百餘家と數多く列擧する點、王陽明を特に「王子」と呼稱することなどを含めて、大鹽中齋の『古本大學刮目』『儒門空虛聚語』『增補孝經纂註』の體例に準據する。『論語學徵』の特色を擧げるならば、ひとまず次のようになる。朱子の『論語集註』を活用して異議のないところは積極的に認めていること。この點は『大學』『中庸』『孟子』の場合も同案である。先儒の殆どが明人であること。明代末期に『四書集註』とは異なる解釋をした明人の四書解を網羅した、鄭觀靜の『知新日錄』『溫陵孩如鄭先生觀靜窩四書知新日錄』和刻本あり）に基ずくものが多いこと。そして大鹽中齋の理解を掲載していること。林良齋が、自説を述べるときは敘述様式は次の七つである。（一）「愚按」（十一條）、（二）「愚謂」（五十七條）、（三）「愚曰」（三條）、（四）「愚聞」（十七條）、（五）「愚聞之」（二十二條）、（六）「愚聞之師」（四條）、（七）「愚管侍先師於洗心洞、問此章。先師曰」（一條）。他に（八）「先師曰」（十四條）がある。（王陽明の門人が自説の中で王陽明を「先師」と呼稱している例が三條ある。大鹽を指す場合と混同することはない）。このうち（一）（二）（三）は林良齋が自説を述べたものであることは、いうまでもない。問題は（四）（五）（六）（七）（八）である。結論からい

ば、(七)が尤も丁寧な表現なのであり、これ以外の表現はその省略形で、すべてが林良齋が洗心洞に參學した時に直接大鹽中齋から聞いたものであると理解して誤りはない。凡て五十八條である。

この『論語學徵』には、林良齋は自説を七十一條を記している。續いて多いのは、李南黎が六十五條、王陽明が五十九條、鄭觀靜が五十七條、徐岩泉が四十九條。これ以下はがくつと少なくなる。鄭觀靜は『知新日録』の著者。李南黎・徐岩泉の所説は『知新日録』に收められている。林良齋は『陽明文録』『傳習錄』『王龍溪全集』『近溪子明道錄』『心學拔粹』『明儒學案』を讀んだ形跡が歴然としているが、注解書・編纂書に登場するその他大勢の儒者は、この『知新日録』による。それは林良齋に限らない。『日本名家四書注釋全書』『日本儒林叢書』を繙いてみると、原書を探索することが容易ではない儒者の學説が數多く引用されていることに驚くが、その出所は概ね『知新日録』である。『四書集註』に囚われずに、廣い視野から『四書』の世界を考えてみようとする者にとつては、『知新日録』は實に重寶なものであつた。林良齋もその恩恵を受けた一人であつた。便利のために登場させられた『知新日録』グループを除くと、林良齋は著者本人であるから多いのは當然であるが、王陽明・大鹽中齋が互角に群を抜いている。「我は吾が中齋先生に於いて之を徵す」(前出)と覺悟した林良齋の眞面目が、この『論語學徵』によく顯れているといえる。この精神はこの他の注解書・編纂書にも貫通していると考えて大過あるまい。ただ、これが稿本であることを考慮する必要がある。これだけ大鹽中齋に對する思い入れを込めた著書を林良齋は公刊する意圖はあつたのだらうか。大鹽事件の探索が厳しかつたことを考えると、林良齋は「公刊を意圖せず」に始めから「遺書」になることをわきまえて著したの

ではなかつたか。この『論語學徵』の執筆年次は大鹽中齋の死後ということしかわからない。これ以外の注解書・編纂書に大鹽中齋は登場しない。近藤篤山との學術論争には大鹽中齋は片鱗もその姿を顯わさない。池田草庵・池田盛之助が訪ねてきたときには、大鹽事件から既に八年が過ぎていた。それに共に良知心學を生きる同學ということも手傳つて、洗心洞における修學體驗を吐露したのであらうか。

## 六 大學古本傍注について

新儒教徒たちも五經を基礎的教養として学ぶけれども、重點は四書にある。林良齋も勿論そうである。先に記した如く、良齋には四書のすべてに注解を施している。『中庸』については『中齋先生中庸講義』があり、中齋の影響は歴然としている。また『孟子』の注解もあるが、これについての解析は今省略して、『大學』について述べることにしたい。

『大學』は「聖學の規模」を示すものと位置づけられたために、その理解には注解者の本領が如實に現れる。そればかりではない。『大學』のテキスト問題が絡むから、この『大學』をいかに理解しているかを見ることは、その儒者の思想を計るリトマス試験紙の役割をはたす。周知のように、『大學』のテキストには、代表的な者として朱子の『大學章句』・王陽明の『古本大學』・豊坊の『石經大學』がある。明學の殿將である劉念臺は『大學』の解釋には七十二家の説があつたというが、テキスト問題がらみであつたことは云うまでもない。林良齋は勿論『古本大學』を採用する。この『古本大學』は寛政十一年(一七九九年)には和刻されている。佐藤一齋には『大學一家私言』もあるが、その後王陽明の『古本大學傍注』を見ることを得て、文政

十二年（一八二九年）に『大學古本傍釋』を著している。大鹽中齋が『古本大學刮目』の稿本を完成するのは、その四年後の天保三年（一八三二年）である。「古本大學刮目自序」は、『大學』の解釋史の梗概を述べて、最後に次のように言う。

余讀古本大學、自有于茲。非徑讀大學白本也。讀昔人讀大學以所著之群書、而治白本、服膺其致知格物之訓。近破迷信、猶如刮目然。因又就白本成節次、每節次置陽明子及儒先之說、而余按語亦附焉。名曰古本大學刮目。正將之死以修心理不二知行合一之學。然則不但不負陽明子之教、庶幾亦不叛孔子程子之學要、與朱子之本旨矣。

この『古本大學刮目』は、自序・凡例・綱領・引用姓氏・（王陽明）『古本大學傍注』・『大學』という構成になっており、綱領と『大學』に先儒の説を引用した後に「後素按」として大鹽中齋が自説を展開している。引用姓氏には王陽明一人を子と稱して筆頭に掲げ、以下二百三十名を列挙する。偉觀である。新儒教の世界で朱陸論争と並んで論議の賑やかであった『大學』問題を、『古本大學』の立場からではあるが、歴史的に多面的に論究した力作である。當該箇所字義に始まり文義に及び、それに關する先儒の説を引いて當否を論じ、その形而上學的根據を提示し、實踐論にも及ぶという有様で、『大學』の場を借りて、我が聖學を語り盡くしたという印象が濃厚である。そしてこの『古本大學刮目』が「陽明子の教え」に負むかないことは勿論のこと、「孔子・程子の學要」と「朱子の本旨」にも背かないものであると、大鹽自信が公言していることは注意したい。ここでいう「學要」と「本旨」とは「陽明子の教え」と矛盾しないものと大鹽が把握したかぎりでの「學要」であり「本旨」であることは云うまでもな

い。『洗心洞刮記』や『儒門空虚聚語』にみられる程朱理解と同案である。積年の研鑽の成果を「規模」を示す『大學』に注ぎ盡くした自信の作であった。それだけに大鹽が刊行に當たつて用意をこらしたのも頷ける。

この『古本大學刮目』に跋文を執筆することを師から直接命じられた時の、林良齋の感激はいかばかりであつたらう。良齋にも、「聖學の規模」を示す『大學』に關する發言は當然に少なくはない。『大學之序』『大學功夫』『朱學要旨』は「朱子の本旨」を明らかにしたものであるが、『大學』白文に即して述べたものではない。『大學』全體に就いては『大學略講主意』が著されたに違いないが、今は失われてしまった。残念なことではあるが、幸いに『大學古本傍注』が残されている。序跋はない。王陽明の「大學古本序」と『大學古本』白文に良齋が傍注を施したものである。良知心學に立脚して傍注が施されていること以外に特色はない。また大鹽の『古本大學刮目』との關係を示すものもない。恐らく、『古本大學刮目』の壓倒的な影響下に、むしろ『古本大學刮目』が刮目させる効果はあるにせよ、論者・論題が多岐に亘ることを考慮して、要所のみに要旨を注記したものでよいであろうか。

### 七 編纂書にあらわれた大鹽中齋の影響

林良齋の注解書には、見てきたように良齋自身の考えが、直接に示されている。それに對して、編纂書は、先哲の要語を格別の編集方針の下に編集して、自らの思想を開示しようとする。たとえ、自らが語る場合にもあくまでも最小限にとどめて、先儒の言葉で以て自らが眞理と考へる世界を訴えようとするものである。良齋の編纂書の分量を



元本の丁數で示すと、『陸王學徵』は六十二丁、『朱學要旨』は十一丁、『學徵略』は十三丁、『學徵彫題』は二百十七丁、『類聚要語』は三十二丁、『聖宗徵言』は十四丁である。編纂書ではないものの、自戒の箴言を記した『自明軒剖記』(七丁)、『自明軒自警錄』(七丁)は小冊子である。この内、『學徵略』『學徵彫題』『類聚要語』は天保十二年三月の序文を冠する。林良齋三十四歳の執筆である。編纂された思想内容は基本的には差異はない。『朱學要旨』『聖宗徵言』は草稿である。『學徵略』『類聚要語』は『學徵彫題』の要語を略したものである。『學徵彫題』は元亨利貞の四分冊であるが、それぞれは次のような標題のもとに編纂されている。

元、徵虛說・徵無知空空屢空說・徵無善無惡說・徵天人說・徵死生說・徵理氣心性命說・徵心理說・徵親民說・徵致知說・徵格物說・徵知行說・徵孝說・徵乾知坤能易簡說・徵善惡一物說・徵人心道心說・徵誠意誠身說・徵窮理說・徵盡心說・徵主一說・徵天下歸仁焉邦家無怨說・徵靜坐說・徵讀書說。按語。

亨、虛說・無知空空屢空說・無善無惡說・天人說・死生說・理氣心性說・心理說。利、親民說・致良知說・格物說・孝說・知行說。

貞、乾知坤能易簡說・善惡一物說・人心道心隱微不覩不聞無聲無臭說・誠意誠身說・窮理說・盡心說・主一說・天下歸仁焉邦家無怨說・靜坐說・讀書說。

この標題を一瞥して分かることは、第一冊の元卷が文字通り、『學徵彫題』全體の基調を徵する言説を編纂しており、亨利貞の三冊はそれを再確認する發言を集録していることである。『學徵略』は『學徵彫題』元の姉妹編のような内容になっているのも、『學徵彫題』そのものの性格に起因する。そして、ほぼ同時期に執筆されたと思われる

この二書の序文の主旨が殆ど同じであることが、両者が緊密な関係にあることを物語る。但し、序文の云うところと本體とが一致しない處があるので、二書共に未定稿かと思われることである。例えば『學徵略』の序文では、「乃ち其の説を類聚して一卷と爲し、名づけて『學徵』と曰ふ。別に陸王の師弟及び私淑の説を採りて、附録三卷と爲して以て贈る」(原漢文)という。しかし、今書名は『學徵』ではないし、附録三卷はない。むしろこの序文は『學徵彫題』の内容に合致する。此の部分に相當する『學徵彫題』の序文は、「乃ち經語若干を擧げて以て之を示すも、而も猶未だ啓けず。故に遂に隋唐以下の、世の尤も尊信する所の諸儒の論説を歷舉して以て徵す。客默して退く。同志之を聞き、懇ろに之を録せんことを請ふ。固辭するも得ず。因りてその説を類聚して、名づけて『學徵』と曰ふ。又陸王師弟私淑の説を頭に載す」(原漢文)という。本來は第一分冊のみを『學徵』といい、第二分冊以下の亨利貞の三分冊が『學徵彫題』と命名されたのである。第二分冊の表紙にのみ學徵彫題と記されたのは、その意味である。『林良齋全集』では、『論語學徵』『學徵略』と識別するために、全體の書名を『學徵彫題』と標題した。

ともあれ、いずれも林良齋自身の學徵を示したのが、これらの編纂書である。ここにも「我は吾が中齋先生に於いて之を徵す」と告白した師大鹽中齋の影響を見て取ることができる。「虚說」以下の標題の下に編集しているその編纂の様式、収載された先儒の選擇、選擇された學說にも、もちろん見られるが、序文の敘述様式が、實は大鹽中齋の『古本大學刮目』の自序の敘述様式を踏襲していることである。架空の質問者に、程朱學は聖學であるが、陸王學は禪學であるから、それを兼學するのは間違ではないのか、といわせる。それを切り返し

て、陸王學が禪學なら、程朱學もまた禪學であり、誤りと云うことになる。しかし、よく考えてみると、陸王學こそが聖學であり、程朱學も陸王學と其調を同じくするのであると、その證言を経語・先儒に求めて、陸王學を異學とみる世儒の不見識を逆に非難している。このような議論の進め方は、大鹽に始まるわけではないが、林良齋の場合には、大鹽の影響とみてよい。編纂の様式・序文に示された發想ばかりではない。自説の援軍として藤原惺窩・顧憲成を持ち出してこころも同案である。以上、編纂書の特徴について述べてきたことが、それが尤も顯著に現れているのが、實は『陸王學徵』である。以下、『陸王學徵』について、述べることにする。

『陸王學徵』の序文の執筆年次は分からない。しかし、序文の内容からして、『學徵彫題』『學徵略』とほぼ同じ時期に執筆されたと思われる。たとえ執筆時期に距たりがあつたとしても、その間に考え方に根本的な變化があつたとは考えられない。林良齋の思考の特色を知るのに恰好な一文なので、次に全文を掲げる。

余平日兼修程朱陸王之學。客謂余曰、予聞程朱則聖學、而陸王則禪學矣。今吾子兼學之、不幾於薰蕕同器已乎。曰。以陸王爲禪、則程朱亦禪也。不但程朱、古聖賢亦皆禪也。何者以心外無別法也。乃學經語數則示之。而猶未啓。故遂歷學王通以下所尤尊信諸儒之語以徵焉。客茫然而去。友人聞之、懇請錄之。固辭不得。於是類聚其語、題曰陸王學徵。又窃附一說於後以贈。於乎。空虛良知說、世儒之所忌也。而余不惟口之、萃編斯書。焉得免於千謗百譏哉。雖然、此篇皆先儒成語、而非余創說也。則人之仇我、於我何有哉。林久中識。

この序文が、所謂朱陸論争に對する林良齋なりの結論として述べら

れていることにまず着目したい。この序文に沿つて順を追つて述べるならば、まず、林良齋が陸王學を專修するのではなくして、程朱をも兼修していると告白していることにひとまず注目したい。つまりは程朱學を聖學から排除していないことである。心學の立場から朱子學・陸象山學を調停兩可の立場を宣言した人に、吳草廬や程敏政がいるが、朱陸論争を畫期させる發言をしたのは、實は王陽明であつた。朱子は晩年に舊來の自説を「中年未定の説」として自己批判して、眞の心學に開悟したのであり、それは王陽明が開拓した良知心學の世界であつたが、残念なことに、開悟した後に自説を一新した所説を著すことなく、死去してしまつた。そのために今に残されている朱子の學説は中年未定の説である。以上が王陽明の『朱子晚年定論』の骨子である。その後、朱陸論争の中で朱子理解が深化した。陸王に荷擔する者は『朱子晚年定論』の路線を強化する試みがなされたが、他方、朱子學陣營では『朱子晚年定論』に示された朱子理解が事實理解としても思想理解にしても、誤解と錯誤に満ちているとして、激しい反駁書を著した。その白眉が王白田の『朱子年譜』であろう。しかし、大鹽中齋も林良齋もこの『朱子年譜』を見ていない。彼らが「世儒の説」として意識していたのは、その一つ前の陸隴其に代表される陽明學批判である。十七世紀の人である陸隴其の學説を十九世紀の大鹽や良齋が假裝敵としたことを、不思議に思われる節もあろう。しかし、大鹽中齋が『洗心洞劄記』で展開した世儒批判は、陸隴其批判の形をとりながら、實は寛政の三博士に代表される、頑なに陽明學を拒否する、硬直した聖學理解であつたことを想起したい。朱陸論争を意識して周到に編集された『洗心洞劄記』の中で彭定求はともかく、朱子學者の顧憲成や湯潛菴がことのほか高く評價されているのは、彼らの陽明學

理解が平衡感覺にすぐれていて、陽明學の長所を冷靜によく把握し、陽明學が果たした歴史的功績を的確に評價していたからである。林良齋は、朱陸論争を處置するに當たつて、大鹽中齋のこの姿勢を繼承する。王陽明は、性善説の原理主義を高唱して「朱子學」を似非の性善説理解であると非難した。しかし、朱子學と雖も性善説を大前提として立論しているから、朱子學派の人々の所説には、性善説の原理主義に取り込むことのできる發言は少なくない。陸王學を基本的な立脚地とする林良齋が、程朱を兼修するということは、少しも矛盾することではない。むしろ、程朱と陸王を全く背反するかに理解するのは、黨派意識に驅られた朱陸論争に誤られたものであり、性善説を基本原理とする實踐倫理學を眞摯に生きようとするとき、所謂程朱學者たちの所産を高飛車に拒否することは、その心學をやせ細つたものにしかならない。性善説を基本原理とする、所謂廣義の心學の一つとして大鹽なり、林良齋の新儒教理解、あるいは朱陸論争の處置を見ると、いかにも尤もな把握の仕方であると評價できる。このように性善説の原理に照らして程朱學の所産を自陣に取り込んでいるのを捉えて、陽明學者でありながら程朱學に寛容であつたなどと評價するのは的はずれである。そもそも陽明學は性善説の原理主義をめざしたのであり、その限りでは許容するものの、原理主義に弛緩をもちたらす言説に對しては手厳しく非難しているからである。

この序文で禪學が非聖學として持ち出されているが、これは禪學が「いよいよ理に近くして大いに眞を亂すもの」(朱子「中庸章句序」と理解されていたからである。「理に近き」とは禪學も「本來完全」を前提にして立論していたことを指す。

さて、『陸王學徵』も亦、徵太虛・徵空空屢空以心體言など以下、

すべて二十の標題のもとに周張二程邵、李延平・朱子・許魯齋・吳康齋・薛敬軒・胡敬齋・蔡虛齋・呂藍田・文中子・謝顯道・楊龜山・呂東萊・眞西山・汪石潭・游定夫・費約齋の説が收められている。すべて「朱子學者」の發言である。林良齋が廣義の心學に立ち返つて彼らを良知心學の援軍に引き入れて立論していることが見て取れよう。この序文の後半で「一説を附す」と述べるのは、「附載答人書略」をいう。この一文は三段に分けられるが、第一段の冒頭に次のように言う。

窃謂、凡論古人、當先以古人之心爲心、而後彼之同異得失、始可得而議也。已。朱陸之辯、古今紛々。學朱者以陸爲異端、學陸者目朱爲俗學、如仇讐然。然而余閱其文集。

この『陸王學徵』の最後に、朱陸論争に對する態度をあらためて宣言しようというのである。そしてそれは先人の説を踏襲したのではなくして、自分で朱陸兩者の言いつ分を検討した上での結論であることを力説する。朱陸兩者の主張を『朱子文集』『陸象山全集』に檢證して、次のように結論する。

今讀其書、想見其爲人。尙能使人勝心消滅無迹、非庶乎無我者、而能如此哉。而彼曉々者、各挾私任我、唯勝之務、自以爲有功於師門、眞所謂以小人之腹、計君子之心也。焉得窺二子學術之闡奧乎。

後世の朱陸論争は、勝心に驅られた門流に起因するものでしかなく、兩者の發言を平心に見ると、本來は朱子の學術と陸象山の學術は決して背反するものではないという。このような理解は佐藤一齋にもあり、大鹽中齋にも見られるものであり、獨創性はないが、世儒(俗流朱子學徒)の陽明學に對する批判をかわず時によく用いられた論法である。

第二段においては、藤原惺窩が林羅山に與えた書簡を引用して、藤原惺窩を自説の先驅者と確認して高く評價する。日本における新儒教は、藤原惺窩・林羅山の師弟問答に開端する。そしてその問答は、輸入元の中國明代末期の學術思想界が朱陸論争が激しかつたこと、輸入経路の朝鮮朝が朱子學一尊であつたことが重なつて、朱陸論争をどう理解するかをめぐつてのものであつた。林羅山は陳清蘭の『學蔀通辯』に基づいて高飛車に陸王を非難する。良齋がここに引用したのは、羅山のその姿勢をたしなめた藤原惺窩の二通の書簡である。朱陸論争に對しては黨派心に驅られることなく平心に理解した人として藤原惺窩を高く評價するのは佐藤一齋に既に見られる。

第三段においては、孝説を開示する。大鹽の『増補孝經彙註』の影響というよりも、實踐倫理學を孝に收斂させる主張を繰り返し述べた良齋の特色であろう。ほぼ同じ文章が『自明軒自警録』の冒頭その他に掲載されており、林良齋が力を込めて主張しようとしたことがよく分かる。

『陸王學微』の一文と同時期に編纂されたに違いない『學微』『學微略』の序文が同一内容であることは先に述べたとおりである。この二書にも最後に「跋に代える」として一文がある。『學微略』のそれは藤原惺窩の二書の抜粹にすぎないが、『學微』のそれは、文頭に顧憲成の「日新書院記」を掲載する。この「日新書院記」は朱子學と陽明學を兩學の特色を把握した上で、時流の中でそれぞれが果たした歴史的役割を見事に活寫した名文である。顧憲成のこの一文を平衡感覺に勝れた朱陸論として高く評價したのは、やはり大鹽中齋（『儒門空虛聚語附錄』）であつた。

大鹽中齋の死後四ヶ月過ぎた、天保八年六月に、林良齋が揮毫した

大鹽中齋と林良齋

「致良知」と題する一軸がある。四百六十三字の長文である。先儒の要語を列記したものである。收められたのは孔子の語三條、孟子の語一條、二程子の語一條、大程子の語一條、張子の語二條、呂東萊の語一條、朱子の語一條、陸子の語一條、胡敬齋の語一條、王子の語二條である。すべて十四條である。さすがに大鹽の語はない。良齋自身の語もない。しかし、ここに揮毫されたものはすべて良齋が自らのものとしたものである。ここには既に程子・朱子などの「要旨」「本旨」が取り込まれており、このような姿勢は大鹽譲りのものであり、そのような基本方針のもとに注解・編纂が行われたことは、述べてきたとおりである。

## 八 終わりに

大鹽中齋と林良齋の關係については、大綱についてはほぼ述べ盡くしたかと思う。最後に「懷刑説」に觸れることにする。

大鹽中齋は天保二年孟春に、始めに『論語』里仁篇の「聖人曰、君子懷刑、小人懷惠」を大書し、次に孫淮海の近語を中書し、その後「愚謹按」として天刑と人刑を論じた一文を細書した大幅がある。これに觸發されて良齋が著したのが「懷刑説」である。全文を次に掲げ

五刑之屬三千、雖世之宿學、試自細檢日用念慮之微、能超然乎刑外者有幾。一念之妄、雖未即刑、而既爲刑中之人矣。可謂不忝爾所生乎。況縱幸免於人刑、焉能免於天刑。故懷刑之要、唯在自訟慎獨而已矣。

大鹽の懷刑論の要旨を表現したものと見える。良齋にとつて大鹽中齋と邂逅したことが決定的な意味を持つたことを象徴する一文であ

る。注解も編纂も、ここにいう「自訟慎獨」を確認し確信し體認實踐するためのものであった。そのことを我々に示してくれるのは、弘化二年（時に良齋は三十八歳・大鹽の死後八年）八月九日に多度津を訪ねてきた池田草庵との終生に亘る「心友」同志の間に交わされた往復書簡集である。「喜怒哀樂の未發以前の氣象」（本體）を求めて靜坐體認の實踐に熱中する林良齋の姿が浮かび上がってくる。とりわけ池田盛之助が弘浜書院で林良齋に侍學した経緯を記す『己酉日記』は、林良齋の功夫の樞要が「靜坐體認」であつたことを物語っている。大鹽中齋の壓倒的影響下に思索の世界を豊かにしていった林良齋ではあるが、林良齋が大鹽の「亞流」でありながら、「模倣」に終わらなかつたことを我々に示しているのは、彼の心性論功夫論である。林良齋の思想の特徴ともいえる「自訟慎獨」「靜坐體認」を要とする心性論功夫論は、劉念臺を信奉した池田草庵との往復書簡集に端的に見られる。池田草庵との間に交わされた、林良齋晩年の心性論については、稿をあらためて論究することにした。

註

本稿の資料は林良齋の著書については多度津文化財保存會編吉田公平監修『林良齋全集』（ペリカン社・一九九九年五月二十日刊）による。大鹽中齋の著書については『洗心洞割記』については『佐藤一齋・大鹽中齋』日本思想體系・岩波書店、『古本大學刮目』『儒門空虛聚語』『増補孝經彙註』は『日本陽明學』下巻・大鏡閣を用いた。

参考文献

木南卓一『林良齋研究』昭和五十八年九月  
岡田武彦・近藤則之『林良齋・近藤篤山』昭和六十三年四月・明德出版社

大西晴隆・疋田啓佑『春日潛菴・池田草庵』昭和六十二年十二月・明德出版社

荻生茂博「中齋學の輪郭と佐藤一齋の學と比較して」『大鹽研究第二十四號』一九九八年三月

白川武「弘浜書院を開いて教育に努めた家老、林良齋」『江戸時代人づくり風土記・香川』農文政、一九九六年十二月

鹽田道雄「林良齋と池田草庵の交わり」『中州遊覽日記』『文化財協會報』平成二年度特別號、香川縣文化財保護協會

鹽田道雄「晩年の林良齋」『文化財協會報』平成八年度特別號、香川縣文化財保護協會

拙稿「江戸後期の朱陸論と由來を論じて一齋・中齋に及ぶ」『源了圓編『江戸後期の比較文化研究』ペリカン社、一九九〇年一月

拙著『洗心洞割記』上下二巻、たちばな出版、一九九八年九月